

10月号の天気コラム

紅葉前線の速度

紅葉は大別して、葉が赤か黄のどちらか二色に変わります。赤は葉が赤色の色素をつくりだしますが、黄はもともと葉に含まれている黄色の色素によるものです。葉が色づきはじめるのは最低気温が8～9度以下の日がつづくころ、紅葉前線は、平均すると10日に約500kmの割合で山から麓に下りてきます。北から南へのスピードは一日20kmです。 *『季節と暮らす365日(日本気象協会編、アリス館)』より

会報閲覧室(玉造連盟事務所)

『噴煙』2017年10月号・No.254

鹿児島勤労者山岳会／12頁

毎月、各会から会報や府県連盟ニュースが連盟事務所に届けられています。この会報・ニュースは、いつでも閲覧できるように連盟事務所(玉造)の会報閲覧コーナーに置いています。いつでも是非ご覧ください。

今回は鹿児島県の鹿児島勤労者山岳会(以下鹿児島労山と略)の会報を紹介しましょう。毎月、連盟事務所に届けられるA4班の鹿児島労山の会報は、前月の会山行の4枚のスナップ写真で飾られています。10月号は50周年記念登山の開聞岳、楽しそうな18名の笑顔で山岳会の雰囲気が伝わってきます。会報名の桜島の象徴でもある『噴煙』で、連盟常任理事の方々もこの噴煙にひきつけられていました。山行報告も3～4ページできちんとまとめておられ、報告も「感想欄」(このスタイルで続けられているようです)から始められているのも画期的、著者の山への想いで一気に引き付けられていきます。山行報告のあった槍ヶ岳や中央アルプスも航空機を利用、登山への想いは長距離も越えていくようです。連載の「よも山」も著者の心が温かく、こんな会報創りを続けていきたいものです。

10月、この一冊を『凍』(沢木耕太郎、新潮文庫)

最近、私たちの山仲間の話題に出てこなくなった『凍』のことを。著者は私の好きなノンフィクション・沢木耕太郎、とても歯切れの良い美しい文章でいつも本の世界に私を招待してくれます。30年前から刊行が始まった『深夜特急』の紀行小説は、誰しも一度は憧れる気ままな世界旅行に触れることができます。私の沢木耕太郎への世界は、ここから始まりました。『凍』は世界的クライマー山野井泰史・妙子夫妻の壮絶なギャチュカン(ヒマラヤ山脈、7,952m)登攀を描いたノンフィクションです。前人未踏のギャチュカン北東壁を挑むことを計画しながらも現地でも無理と判断、北壁からの挑戦に切り替えて登頂に成功する壮絶な物語です。『凍』を読み返して、あえて困難に挑戦し続ける山野井夫妻の姿勢だけでなく、きっと山の無感心の人それぞれに感銘と勇気を与えてくれると思いました。

◇編集後記◇

『大阪労山ニュース』編集を担当して1年半、実はその発行・印刷（基本的に連盟理事会の行われる第4木曜日と同じ週の月曜日）までの一苦労があります。原稿の締め切りが発行の前週の木曜日で大半の方は原稿の締め切り日を厳守して下さいます。そのあとの三日間を乗り切るのが少し難しいのです。印刷の月曜の朝には原稿を完成しておかなければなりません（月曜日の午前中が勤務で、そのあとに連盟事務所に向かいます）。さて三日間、たいてい週末は登山絡み、ましてや金曜発の山旅の場合は、徹夜作業の日もあります。日程の余裕があっても丸々日曜日がつぶれることも。時にはPCやプリンターが不調の場合は最悪寸前です。しかし、これらの苦難も「締め切り厳守」で原稿を頂いているからであると、今日に思うのです。

9月8日（金）～9日（日）、四国カルスト（愛媛・高知県境）に行ってきました。四国カルストは日本の三大カルストの一つとして知られ（他に山口県・秋吉台、福岡県・平尾台）、地元のカメラマンでいっぱいでした。ところで別紙の地図（西日本の石灰岩分布）を見て、四国カルストと他のカルストの分布にずいぶん違いがあることに気が付いたのです。石灰岩の分布域は中央構造線の南側に沿うように2列存在しており、そのなかに四国カルストや香美市の鍾乳洞（龍河洞）があります。とても不思議で興味深いですね。新しい四国カルストの世界に入って、今後に中央構造線や1,000mの高原に位置する四国の石灰岩地域を調べてみたくなりました。これから四国カルスト詣でが続きそうです。（大西）

今月も各会より会報を送っていただきました。安治川山の会ニュース（安治川山の会）、やまなかま（泉州労山）、きたろうニュース（きたろうHC）、にしよど（西淀労山）、ぼんぼん山（高槻）、奈良県連ニュース滋賀県連ニュース、福岡県連通信、労山おかやま、やまと友の会、HCかざぐるま、京都労山、噴煙（鹿児島労山）、兵庫労山会報、県連ニュース（和歌山労山）、明昭（西宮明昭山の会）

編集・発行 入澤、大西秀、笠井、園、高橋、中井、中尾、服部、大西清
